

疑似ステージ

平井愼二

1) 標的行動の疑似

①治療作業の概要

治療の標的とする行動の最終部分あるいは最終に近い部分を、疑似的に行う（真似をする）ことを反復する。行動の疑似においては生理的報酬を生じさせないようにする。また、標的の行動が本能行動の過剰な作動によるものであれば、先天的な反射が連続する部分に疑似の行動を至らせないことや行動の失敗を明らかにすること等の調整（次の講義8で焦点とする）を加える。

疑似においては道具や状況を現実のものに近づけて、連続した行動をする。

②このステージの主な効果

前記した疑似を行うことにより、疑似で再現した部分の行動を司る反射連鎖が抑制を受ける。この作業を反復することにより、標的行動の最終部分を司る反射連鎖の作動性は抑制が進み、最終的には作動性を失う。

③作業の頻度と期間

疑似と疑似の間は時間間隔をとらなくてもよい。しかし、1日のある時間帯に集中して疑似を多く行い、他の時間は疑似をしないということは避ける。

頻度は1日に20回以上を目指す。物質摂取に対する疑似はその頻度で患者が自室において単独で行える。しかし、万引きや痴漢、パチンコ等の疑似は、職員が患者を誘導して別室に移動して行うことから回数に制限があり、1日に10回ほどにも限られることがある。

このステージの期間は2～3週間ほどであり、この間に疑似の累計は200回以上を目指す。

後のステージでもこの疑似作業は、頻度を1日に2回ほどにして継続する。

④他の治療作業との関係

制御刺激をすれば、その後の疑似までの時間は少なくとも20分以上あける。

仮に制御刺激の後に直ちに疑似を行うことを反復すれば、制御刺激の効果は崩れる。

⑤効果を把握する方法

疑似を10回する毎に1回は、患者が自分で疑似的な行動を開始した後に、途中で行動を中断する。

疑似ステージの当初は、その中断時に苦悩や違和感等が生じる。その感覚が生じるメカニズムは次である。

まずは第二信号系が意識的に行動を開始するが、その行動が刺激して第一信号系の反射連鎖が作動し始める。つまり第一信号系が身体を動かしている状態になる。中断とは、その第一信号系により行動が進んでいる状態に対して第二信号系が行動をとめ

るものである。そこに衝突が生じて押し合い、その押し合いを苦悩や違和感等として感じる。

その苦悩や違和感に対して、急ぐことなく、中断後10秒から20秒ほどして制御刺激を行うと、数秒で苦悩や違和感が消え、安堵が生じる。

その感覚が生じるメカニズムは次である。

二つの信号系が異なる方向に作用して、押し合っている状態に対して、制御刺激により第一信号系の反射連鎖の作動を弱める。従って、押し合いが弱くなり、苦悩や違和感等が消え、安堵感が生じる。一部の患者には、制御刺激の効果は大きく、爽快感を感じることもさへある。

当初は、中断時の苦悩や違和感、制御刺激時の安堵感や爽快感を強く感じるが、疑似を反復しているとそれらの感覚は弱まっていく。

その変化は、標的行動を司る反射連鎖の作動性が徐々に弱くなっていることを示すものであると対象者に説明し、理解を得て治療意欲を保つ。

2) 標的行動の描写文の作成と後の読み返し

①作業の概要

標的行動を反復する生活の典型的な一日を選択し、起床時から日常の生活を経て標的行動を完了するまでに自分や周囲に生じた現象を、作文用紙10枚から30枚に、人、物、景色、動き、声、音などを書き出して、詳細に描写する。一方で書かないようにするのは、登場人物に関する解説やそのときの気持ち、考えたこと、現在の反省などである。

この描写文の作成は疑似ステージの当初に行う。

完成した描写文は、後の維持ステージで読むことを反復する。

②この治療作業の主な効果

疑似や想像（後出）の反復後は、標的行動を司る反射連鎖は抑制されており、思い出すことにより反射連鎖を刺激しようとしても反射の作動性は低減しており、反応が生じず、なかなか思い出せない。思い出せないことを刺激にして生じるはずであった反射は、刺激を思い出せないので刺激されず、その反射は放置される。

その現象への対応を怠れば、次の危険性が高まる。

その反射が放置される期間は続くので、徐々にその反射は回復して、作動性を増す。その回復した反射に対する刺激に後に社会内で遭遇することで、反射連鎖は作動を開始する可能性、つまり、標的の行動が再現する危険性が高まった状態に至る。

その現象を避けるために、標的行動を反復する生活の典型的な一日の行動を司る反射連鎖を構成する刺激を、思い出せなくなる前に消えない形で書き出しておく作業が標的行動の描写文の作成である。その描写文には標的行動を生じさせる刺激を順序良く並べて保持されることになる。

疑似ステージと想像ステージを終えた後は、患者の第一信号系と第二信号系のみで標的行動を行った日の刺激を再現することが困難であるので、標的行動の描写文を読み返すことにより、標的行動を司る反射連鎖を作動させた刺激を効果的に第一信号系に与え続けることができる。

3) 辛かった体験の書き出し

疑似ステージで行う体験の書き出しは、辛かったことである。

辛かったことを書き出すことはストレスを第一信号系に与える。第一信号系は生きる方向に激しく作動し、疑似においては標的行動を司る反射連鎖は激しく作動する。しかし、生理的報酬は生じないので、効果的に疑似を行える。

- ① 辛かった事を簡単に100話、書き出す。
- ② 辛かった事を詳細に100話、書き出す。